

彩星^{ほし}だより 第59号



若年認知症家族会・彩星の会会報

平成25年1月18日

〒160-0022 新宿区新宿 1-25-3-302 TEL03-5919-4185/fax03-5368-1956 E-mail:hoshinokai@star2003.jp

定例会のあり方に一石を投じた 高橋正彦先生による質疑応答重視の「講演会」

今年最後の定例会は、「彩星の会」発足のメンバーとしてご尽力いただいた、高橋正彦先生（大倉山記念病院精神科）をお迎えしての、「医療から見た若年性認知症の現状」の講演である。特に、今回は参加者からの質問重視の特色ある講演であった。

まず、昨年アルツハイマー病の診断基準が第1段階は認知症の始まり、第2段階、軽度の問題は表面化するが日常生活まで支障しない。第3段階として明確な症状は現れないが脳内で変化が現れている。とする新基準が制定された。この説明から始まった。

アルツハイマーであるかは、認知症発症診断、検査薬ウアミピット、アミロイド量を測ることで症状の有無が発見できる。一方、免疫療法での実験ではアルツハイマー軽度、中度、重度患者では成功しなかった。が、発症前であればATD発症を阻止の可能性ある。いずれにしても神経細胞死滅で終わりであることには違いない。60歳後半を過ぎると、脳内にアミロイドフラークある人でも、そのうち3分の1は死ぬまでアルツハイマーを発症しない。現在の医学では症状の発生を食い止めたり、遅らせたりの特効薬はない。との説明がなされた。

★

次に認知症患者への認識として以下の話となった。認知症であっても、役に立っている、必要とされていると本人が感じることでBPSDは極力少なくなる。例として、一人暮らしの高齢者は自立が必須であるがゆえに、他人依存にならないための自己防衛に最大のエネルギーを費やす。物忘れしないように努力し、忘れても思い出そう工夫する。この継続が潜在能力を高めることになって発症を遅らせているとも言える。次に、本人の「自己愛」を大切にされているか、自分の能力を高める場があるかである。大きいほどBSPDは出にくい。このことから、周辺症状対応は「自己愛」が大きければ、介護はそれほど関係ないとも言えるぐらいである。面白い例として、老年政治家は年寄りと思っていな

い。まだまだ、役立つと信じ、使命感があると信じている。また、金さん、銀さんの金言に「今の行いは老後の蓄え」と飛行機内でのインタビューは有名である。

★

残り45分となり、参加者よりの質問を聞き、高橋先生からのお答えを抜粋してみた。

①トイレトペーパー使用過剰での詰まりの苦情は、過剰相当分のトイレトペーパーを前もって渡しておく。などで対処する。②ショートステイから帰宅後、歩行が困難になった。の質問に対して、これは施設側に問題があると思われる。受け入れと同状態で退所する。が当たり前である。このような退所はただ預かるだけでの安易な考えの施設によくケースである。契約書に入所と同状態で退所させる。の事項があるかどうか確認して、施設、紹介者のケアマネなどへ現状を訴える。③胃ロウの是非の質問については、留学先のEUでは食事が口から出来なくなったら寿命と考えるのが主流である。日本でも最近は胃ロウ造設延命是非の議論が高まっている。施設側に胃ロウ推奨が多いのは食事時間短縮が本音であろう。④告知（認知症）問題は、主治医の考え方にもいろいろある。私は告知はしない。本人、子供含む家族が主治医の説明を聞き、帰宅してから家族会議を持つことを薦めている。⑤認知症患者の寿命については、余命7年説の医者や20年説の医者があり不信を感じるなどの質問者への回答は、神でないから余命はわからない。認知症の直接原因で死亡することはなく、認知症に伴うことが原因で死亡するが正しい。

★

予定時間ギリギリまでの白熱の質疑応答であった。介護者の切実な心情が会場全体に伝わり、私語がほとんど感じられなかったことが司会者として特に印象に残った。定例会での家族会参加者も本来このような形式の講演を望んでいたのではないだろうか。（文責 森 義弘）

定例会☆本人交流会

11月25日 於：首都大学東京荒川キャンパス

今月は穏やかに晴れ渡るなか、『オールスター忘年会』を開催しました。参加した全員がスターになる忘年会にしようと「オールスター」としました。ご本人は

が乗ってくださるかどうかという不安をよそに、踊りまわりました。お上手に踊る方もおり、隠れた才能を披露なさってくださいました。動き回り疲れてきたと



ところで、今度は歌を楽しむ時間。星にまつわる曲をリストアップした歌集から皆で歌ったり、ご自慢の喉を披露してくださる方がいたり、ギターをしっかりと弾きあげて下さる方がいたり、皆がスターで盛り上がったひとときでした。次は、紅白しりとり歌合戦。頭をしぼり、しりとり方式で曲を歌いあげました(!?) 最後はノンアルコールビールで乾杯、お菓子をつまみながらの談笑をし、一本締めで楽しい忘年会を終えました。

社会の中でも皆がスターとして輝く日

(20名) 参加、サポーター (6名)、今回は家族世話人からもサポーターとして (8名) 加わり、総勢 (34名) の賑やかな集いとなりました。

まずは自己紹介。「秋の果物で好きなもの」をテーマにひと回り。梨、ぶどう、柿など秋の代表格が出てくるなか、果物といえばスイカ! という方もいて多彩でした。続いて輪になってのタクティール。ゆったり、ほっくりし、皆の気分がまとまってきました。そして、いよいよ『オールスター忘年会』の始まりです。いきなりゴーゴードダンス! 皆



の実現を痛感した一日でした。(サポーター・飯田)

定例会☆家族交流会

11月25日 於：首都大学東京荒川キャンパス

高橋先生のミニ講演ではピック病の質問がたくさん出されて交流会の時間が短かったのですが、Aグループには高橋先生が参加されているいろいろアドバイス頂きました。

Aグループ

交流会への初回参加者の集まりのつもりでしたが高橋先生の講演後帰られた方もいて一人だけになったので他グループからも参加してもらいました。

67才のアルツハイマーの奥様を介護している72歳の男性は在宅介護しつつショートステイを利用してい

るがいろんな問題を抱えています。職員の対応により食べたくても食べない、異変行動への抑制など寄り添った介護してくれないなど。

63才の男性を介護している奥様は診断がつかないので病院を転々としたと言います。モノ忘れがあるが塞ぎこんで鬱(うつ)のようでもある。最初は鬱病と診断されたが、それだけでは説明できないのでCTやSPECTなど前頭葉など脳画像診断してやっとアルツハイマーだと分かった。何回も転院している内はヤブ医者ばかりと思ってイライラしたと言います。アリセプトやメマリーを服用して経過を見ている。

高橋先生の話では認知症になると記憶や判断力が低下して本人は自信を失うので鬱（うつ）になるそうです。そこで抗うつ剤を使うと認知症と重なった別の異変症状がでることもあると。

64歳のアルツハイマー病の奥様を介護している男性は慶応病院から板橋の長寿医療センターに転院したが、たまたま臨床より基礎に強い先生で介護保険の申請書記入などに手間取った。今は開業医とデーサービス利用の在宅介護しているが、仕事と介護の両立は難しい。書類作りも大変だ。彩星の会で体験談を聞くのと相談できる場があるので助かっている。

医療専門家である医師は脳の病気に関心があるが本人と介護者の生活に想いが至らないと感じる人は家族会の話し合いでよく出るテーマです。

69歳の奥様を介護している男性が異変に気づいたのは10年前だったそうです。モノ忘れが頻繁に起こって家事がおろそかになりアルツハイマーと分かった時はショックだった。いつも定例会の後の懇親会にも奥様と一緒に参加され、時には奥様の機嫌が損なわれても、やさしく寄り添っている姿がとても印象的なご夫婦です。(文責 今岡善次郎)

Cグループ

今回の私たちグループは、大倉病院勤務の精神福祉士である中居さんを加えてのテーブルでした。

ご本人が入所、入院の方3名、その他施設を利用しながらの在宅介護の方4名を加えて8名の構成でした。そしてアルツハイマー型5名、全頭側頭型2名の構成になりました。やはり介護年数と共に病状の進行状況に応じて、社会資源である利用施設を見直しされ、有効な選択利用に結び付けられて居られている方が大方でした。入所、入院中のご家族は同伴参加できなくても、学習、交流の場、仲間の寄り合いの場として参加を続けたいとおっしゃる方。又、本人への病名告知は家族と打ち合わせしてからにしてもらいたい。それと、在宅介護の方で、本人に合うリハビリ対応をしてくれる施設。介護者、本人ニーズを吸収してもらえる小規模多機能施設に辿りついた。そしてやはり在宅ケアは日々進行してくる病状と周辺症状に悩ませられながら、受け入れて共に暮らしていると云う事でした。

Dグループ

山花、荒屋敷、後藤、鎗田、森（敬称略）

介護についてのフリートーク。各人の発言を①②③・・・で掲載しております。

介護の姿勢について：①本人からの笑顔引き出すために、プロ意識でおこなっている。②イライラして、つい立腹してしまう。③妻という立場の体裁もあるので主人の後方で歩くのだから、いつの間にか自分が前に立っている。④夫婦とも食べ物に興味あり、楽しい場面を作るように努力している。⑤笑顔で接するようにしている。⑥本人への依頼ごと終了時には、オーバーアクションで喜ぶこと。なぜなら、その状態が最高の仕上げ状態であることと理解⑦本人ができることは、出来るだけさせるようにしている。⑧本人ができることでも、無理にさせないで介護者がする。その時間を楽しく過ごすようにしている。

本人の横顔：①バスタブの汚れ落しに同じ箇所を何度も時間をかけて洗っている。②トイレ掃除で、使用済み品の置き場所を選ばずに置くので困る。

排便：①朝の排便がうまくいかない場合に、まだ「ウンチ」が目覚ましていないようだね。と笑顔で話す。②3日に一回ぐらいの排便が普通としている。③便秘薬使用量で調整をしている。

入浴：①介護者と一緒に毎日入浴するが介護者の洗う時間がない。②3、4日ごとに一人で20分ぐらい入浴している。

トイレ：①深夜トイレは、1時間半ぐらいに一回のペースであるため介護者が寝不足状態。②一人で15分ぐらい座っている。ヒーター暖房でふくらはぎが真っ赤になってあわてたことがある。③見守りながら排便させる。

介護日記：①介護状況を箇条書きではなく、記号、マーク、などキャラクター化で把握しやすくしている。お互い心境を話しながら、次回のときには自分（介護者）の成長を報告したい。の言葉で閉じた。



共感と感動の内に終わった フォーラム「若年性認知症を受け入れる社会づくり」

昨年の師走の押し迫った衆議院選挙の翌日、2012年12月17日新宿区の戸山サンライズで開催した彩星の会主催のフォーラムは、共感と感動の大盛況のうちに終わりました。長谷川先生の講演を神様からの贈り物だと言う声、当事者と家族の声は夫婦だけではなく息子や娘の発言や手紙の披露が涙を誘ったという声、涙涙ながらも現実を受け止め明日へ歩むエネルギーを貰ったという声、住みよい社会創りへ行動したいと言う一般市民の感想を頂きました。講演とシンポジウムはいつもの定例会の講演と家族交流会を公開（フォーラムとは公開広場の意味）する形式で実施しました。最後は会場にいた本人・家族もステージ近くに集まって「上を向いて歩こう」を歌いながら閉会となりました。



長谷川先生の講演「若年性認知症のご本人への支援ー温もりの絆を創るー」抜粋

認知症の医学的解説の後、パースンセンタードケアというその人を中心にしたケア、その人らしさを大切にケア、寄り添うケアなど心の世界の話がすばらしかった。医学の大先生であることより、ご家族での生の体験からのお話が印象的でした。どんな状態になっても人の命は限りなく尊く、生きている喜びを支援することが介護者にとっても人生に深みを与える。目を見て話すことで本人は安心する。左脳は壊れても右脳は生きている。人生を明るく楽しい気



分にするのは右脳である。本人を中心にして安心できる居場所と役割を

用意することが家族も社会も温もりのある絆を創ることになる。



★ 彩星の会定例会交流から浮かび上がる「困ったこと」「社会への要望」

10年以上に渡り介護家族が本音で語り合う交流会から「困ったこと」を20項目弱リストアップして本フォーラムのために会員からアンケート調査しました。今回は敢えて医療や介護福祉制度など専門的な項目ではなく、一般市民に理解してほしい地域社会での生活に関係した項目に絞りました。専門家による調査ではあまり問題にならない「外出時のトイレ」「着替え」「買い物」「乗りもの」などが上位にきました。交流会ではアルツハイマーとそれ以外、夫が妻を介護する場合と妻が夫を介護する場合、初期と中後期というんなグループに分ける場合について話し合っています。アンケートでは回答数をグラフ化して皆様が思っている実態を確認して頂きました。なお、参加されたケアマネの方、今岡が在宅介護でお世話になった方ですが、このアンケートを結果を杉並区のケアマネグループで使わせて欲しいと申し出がありました。



★ シンポジウム「本人と家族の思い 専門家の知恵」

田中悠美子さんの司会の下、浴風会ケアスクール校長の服部安子先生のコメントターとなって彩星の会会員、山花洋さん・たつ代さんご夫妻、中村成信さん、伊藤直子さん、太田節子さんから生の体験を話して頂きました。山花さんは職場や息抜きの飲食店の温かい絆、警察犬を使った徘徊時の探索など、中村さんは病気による万引事件、懲戒免職処分取り消しの社会的支援から病気を乗り越えて写真やボランティアでの明るく前向きに生きることを話して頂きました。伊藤直子さんはご主人が発病時に職場の人事や労働組合とのやり取りのお話に加えて、会場の息子さ



娘さんからの手紙を田中悠美子さんが代読しました。息子さんや娘さんのお話に会場の同年代の参加者は身につまされて涙しました。事前に服部先生が登壇する家族会員と3回に分けて会って頂き、それぞれの事情に寄り添って傾聴して頂いたことで皆さんが安心してシンポジウムでお話を披露できる機会になったのではないかと思います。



★ 参加者の声（アンケート）

参加者が合計144人でアンケート回収者は79人にのぼり回収率55%とこの種の催しでは高い回収率だと思います。79人の回収者内訳をみると彩星の会会員25人(32%) 他の家族会会員6人(8%) 医療介護福祉専門職23人(29%) 一般市民23人(29%) マスコミ2人(2%) となり彩星の会と専門職と一般市民がそれぞれ3分の1だったことが分かります。

又評価については「期待以上だった。毎年実施する価値ある」78人(99%)「期待通りだった。毎年実施する価値はある1人」(1%)、そして「期待通りだけど毎年する必要はない」「期待はずれだった」と回答した人はありませんでした。100点満点と言っても良い結果でした。フォーラムレポートを出版した場合の案内希望者は39人(49%) いました。一部アンケート自由記述やメールで頂いた感想を抜粋します。

<彩星の会会員より>

- ・長谷川先生の話は大変分かりやすく良かった。自分の介護も見直せました。介護家族とご本人のシンポジウムは、専門家や医師等の今まで聞いた話と違い、生の声を聞いて大変感動しました。ご苦労様でした。ありがとうございました。
- ・介護者の妻や夫が発信する以上に子供が発言することの意味に心を打たれました。ありがとうございました。
- ・良かった。エネルギーをもらいました。

んからの発病時の修羅場の状況とそこから立ち直ったお話を頂き、太田節子さんはご主人が発病時に小学校4年生だった娘さんの友人関係から周辺に告知できない苦悩の中で

- ・本日のフォーラムで公開された家族の抱える悲しみ、辛さ、苦しみは取りも直さず私も同じです。思いを共有し共感しても世の中が認めて生活保障と本人の人権への理解と尊重が得られずして安心の生活はないのです。これは社会を映す鏡です。人に優しい社会こそ病に最も効く薬であると思っています。
- ・一般的なフォーラムやセミナーでは症状中心となりますが、本人と家族の思い中心にする本日ようなフォーラムも必要だと思います。

<医療介護福祉専門職>

- ・あらためて認知症の方への寄り添い方勉強させていただきました。ありがとうございます。今後も勉強させて頂ければ幸いです。認知症のマニュアルを根本的に考え直す時期が来ましたね。彩星の会はとても心温まる仲間ですね。
- ・こうして若年性認知症になられた方の話を聞きあらためて考えます。今、介護の仕事を長年続けて来た自分は何ができるだろうか？誰でもがどんな状態になっても自分らしさを失わずに生きられるような社会づくりのために、自分の出来る力を出し続けていこうと思っています。
- ・すばらしかったです。場所を変えてあちこちで開催するのが良いのではないのでしょうか。参加して良かったです。感謝します。ありがとうございます。
- ・本人や家族の実体験を直接聞くことができとても感ずるものがありました。
- ・ご本人、ご家族の声はやはり説得力が違うと感じた。フォーラムを拝聴して自分達の活動についても再認識するといけないと感じました。その場その場で一生懸命行っていく事の大切さを職場に持ち帰ろうと思っています。

6p に続く →



- ・私達が素人から始めて3年かかりでたどり着いた「心」『寄り添う』が正解でした。本日のフォーラムで明日からのケアの確信になりました。
- ・貴重なお話を伺えて良かったです。社会福祉の場における介護者、家族として職業としての存在、あり方などもっと多面的にとらえ直すべきだと感じました。
- ・このような発信の機会が必要で、今日、話を聞いた人々は「種」となって社会に広まることになると思います。
- ・現場で働いているとどのような経緯で利用しているか書面だけでは分からないので、施設利用までの様々な困難が分かって良かったです。
- ・皆様の思いが十分に会場の皆様に伝わっていったのも、構成や皆様の協力なしではできないと思っております。家族会の底力ですね。家族会に出れないで一人悩んでいる方々へ向けて、発信していきましょう。



<一般市民>

- ・お一人おひとりのお話が心に染みました。ご本人と家族の思いが良く分かりました。講演とシンポジウムを受けとめ私が出来ることを頑張ります。
- ・要介護者がいればその家族がいる。あらためて認識しました。認知症はその人の人格や社会性を壊すだけではなく周囲とのコミュニティも壊す病気であると思えた。
- ・長谷川先生のご講演、皆様のすばらしいご発言、すべてに感動しました。最後の歌しみじみと心に染みました。心から感謝申し上げます。
- ・伊藤さん、太田さんのお話は感動して涙ができました。小さなお子さんと先のことを考えてどんなに不安だったことでしょう。頑張ってください。
- ・お辛かったと思います。涙ができました。
- ・長谷川先生のお話はとてもわかり易く心に残る言葉が多かった。認知症の方をありのまま受け入れ本人にもそのままでいいと伝えればいいのだとわかった。シンポジウムでの皆様のお話を聞いてそれぞれの苦しみや家族の愛情を感じました。若年性認知症の理解と支援がもっと広がっていくように何かできればと思いました。
- ・右脳のお話、目を見てお話することの大切さ、神さまがそのように創って下さっていると心に残りました。シンポジウムでの実際のお話は本当に良かった。
- ・長谷川先生のお話は「私へのプレゼント」でした。今日のフォーラムで友人と家族を支える勇気が湧きました。涙、涙で感謝、ありがとう。本当にすばらしいフォーラムでした。笑顔で明日につながって！ありがとう！感謝！

- ・「病気は天（宇宙）からのメッセージである。その与えられた試練を乗り越えるところに、その人の成長がある。」という趣旨のものがあります。また、「天は乗り越えられない試練は与えない。」ともいわれます。
- ・今回のフォーラムに参加して、若年性認知症は、家族の成長のために天が与えた試練ではないだろうか、そして、シンポジウムに登壇されたご家族の方は、その試練をほぼ乗り越えられた皆さんであると感じました。
- ・長谷川先生の講演で、一番心に残ったのは、同情（sympathy）ではなく、共感（empathy）で本人に接することだというお話でした。シンポジウムでのご本人・家族の皆さんのお話は、会場に共感を呼び起こすものであり、日ごろの皆さんの心のあり方を感じ、感銘しました。
- ・家族の方で悶々として悲嘆にくれていらっしゃる方が大勢いらっしゃるように思えます。これらの方々とどのように出会い、どのように声をかけていくのかというのが、家族会のひとつの役割であろうと感じました。
- ・人生最良の日の記念となりました。

フォーラムを終えて

家族会の役割として会員同士の相互支援と専門職の先生方から相談だけの内輪のコミュニティにするか、外部の専門家や他の家族会や市民との開かれたネットワークの中で家族会を運営して住みよい地域社会創りまで広げるか、いろいろな意見（異見？）があります。今回のフォーラムでは彩星の会の会員の皆様、世話人の皆様、本フォーラム実行委員会の皆様のお力で成功しましたが、浴風会やアラジン主催の介護者ネットワーク会議、他の協賛頂いた家族会、家族会とは関係ない仕事関係のネットワークの外部資源の活用によることも大変大きかったと実感しています。

参加者のアンケートを見ても、我々のいつもの生の活動をそのまま活かした定例会を公開した本フォーラムが彩星の会会員の介護や生き方にも、医療や介護や福祉の専門職が自分達の仕事の見直しにも、そして一般市民の方々も若年性認知症への理解と住みよい社会創りへの関心を喚起することにも大いに役立つことを実証できたと思います。彩星の会の活動としては1つの実験でしたが、会員の皆様、今後の会の運営において、どのように評価されるか是非お声をお聞かせ頂ければ幸いです。ありがとうございました（今岡善次郎）。

喫茶ふれんど通信 ⑪

営業時間/10:00~15:00

彩星の会担当日/水曜日9:30~15:00



*「喫茶ふれんど」就労希望、見学希望のご家族の方は、
彩星の会事務局までご連絡ください。
Tel.03-5919-4185 (月水金：10時30分~17時)

ふれんどのKさん

昨年の9月、彩星の会の事務所で“ふれんど”の定例会スタッフ会議が開かれていました。私は、偶々用があってその場に居合わせ傍聴させていただいたのですが、その時、神保さんの隣に座っているKさんの顔の表情に新鮮な驚きを受けました。それは、いつもジョイントで仲間と一緒に活動されている和やかな表情より、仕事に対する責任感、緊張感が秘められているような引き締まった顔つきでした。



Kさんが“ふれんど”で働くようになったのは、一昨年の12月からですからちょうど1年になります。元々自ら飲食店を経営されていた料理人ですから、その経験を活かせる場があれば、と希望されていました。

初めて職場として“ふれんど”を見学に行った時、厨房の中の人の動きをジッと見ながら「みんながもう自分で働いているから一人で勝手に手を出しちゃいけないね。出しゃばっちゃダメなんだよ。何をしたらよいか、手を出していいかどうか聴きながらやらないとね」と言われました。Kさんはプロの目で見て、“ふれんど”の厨房はすでに確立していると判断し、その中に自分がどう入っていくか、新しい職場への不安と緊張感があったのでしょうか。Kさんは当時は振り返って「始めはきつかった」とおっしゃっています。

当初は月一回、9時30分からの勤務でしたが、ほどなく“ふれんど”が自宅から自転車で20分足らずという近さでもあり、朝早いことは厭わないと8時30分からの下準備も手伝われるようになりました。今では毎週水曜日フル勤務されています。このことが更に働く意欲と“ふれんど”という職場に対する責任感を強められているよ

うに思います。

水曜日の朝、「トントントントン」というリズムカルな包丁の音が響いてくると、なんだかシャキッとした気持ちになって1日の仕事が始められる、と障害者センターの方々から言われます。食材や道具の扱いなどプロとして養われた身のこなしが発揮されています。元々人柄のよさもあり、ホールでの接客も楽しい雰囲気させてくれます。

“ふれんど”はオープンキッチンですから、厨房の中の動きはお客様から常に見られていますし、お客様と直接対面します。

また、来客数や売り上げも直接目にします。人が仕事をしているところには、対価、評価、家族以外の人間関係があります。“ふれんど”ではそのことが直接的です。その実感が冒頭に紹介した表情になっていると思います。

Kさんは、「今、自分にやれないこともある。やれることをできるだけやる。それを長く続けることが自分が長生きできること」とおっしゃっています。それは、ふれんどの関係者、彩星の会の関係者の願いでもあることでしょう。

(ジョイント 村中)



ふれんど忘年会

お知らせ

家族交流会

日時：1月27日(日) 13:00~16:00

会場：首都大学東京荒川キャンパス（別添地図参照）

講演会：干場代表

代表としての7年間を振り返って、感謝の気持ちを込めて

本人交流会

テーマ『春よ来い！いっぱい笑って福を呼ぼう！』

集まった人達でハンドベルを奏でて、春を呼びませんか？

また、チーム対戦の企画でいっぱい笑って福を集めちゃいましょう！

※参加を希望される方は、

事前予約にご協力お願いいたします。

事務局への電話・FAXで予約を受け付けます。

なお、参加費500円（茶菓代として）を頂きます。

★この機会にサポーターをやってみようかなという方、大歓迎です。是非ともご協力お願いいたします。

■臨床美術ワークショップ参加お伺い

昨年7月の定例会において彩星の会として初めて臨床美術の講演会とワークショップ開催しました。

また10月には新宿区障害者福祉センターのセンター祭で臨床美術協会の皆様をセンターに紹介してコーナーが設置され好評でした。7月の定例会後のアンケートでは再度継続したいとの希望もあり、臨床美術協会へ投げかけておりましたところ以下のような提案を受けました。

今後の計画の詳細は、会員の皆さまからのご意向を聞いてから定例会とは別に話めたいと思います。

やってみたいと言う方は彩星の会事務局までご連絡下さい（今岡）。

臨床美術協会（栗山氏）からの連絡

個々の臨床美術士（3級以上）の責任で対応します。適切な臨床美術士でコスト的にも相談ができそうな方を探して条件などを確認していましたが、今回私の臨床美術士仲間（3級臨床美術士）から以下の条件でやらせていただけないか？という相談がありました。

◎会場：机とイス 通常の横長机 講師分入れて4台とホワイトボードか壁は手配いただく
（新宿区障害者福祉センターで空いている時）

◎日時／月一回、第1木曜など相談の上で設定（平日だと有難いです）。

◎時間／1.5～2時間（セッション前の歌や体操、セッション後の鑑賞会を含めて）

◎費用について

●講師代／12,000円とし、講師1人、サブスタッフはなし。

3家族様の場合1家族（2名）1回4,000円（一人2,000円）

（3家族を想定。増員希望があった際は相談して変更の可能性あり）

●毎回の画材・モチーフ代—1回¥100—¥400、

講師の交通費（下北沢～会場近くの駅までの 往復分）

●初期画材「パステル、クロッキー帳、ハサミ」約2,500円

■ご相談・ご入会は・・・

彩星の会事務局

住所：〒160-0022 東京都新宿区新宿1-25-3 エクセルコート新宿東302

電話：03-5919-4185（電話相談日時：月水金 10時30分～17時）

FAX：03-5368-1956 携帯：080-5005-5298（代表：干場）

Email：hoshinokai@star2003.jp

